

「呼びなおす」

— 2 稿 —

2026/8/2

雨森 れに

〈人物表〉

遠野 圭子 とおの けいこ

(60) 愛の母親

秋山 美紀 あきやま みき

(60) 圭子の友人

遠野 愛 あいの あい

(36) 圭子の娘。性自認は男。晃弘あきひろと名乗る

遠野 晃 あきの あきひろ

(享年55) 圭子の夫。5年前に事故死

1. 遠野宅・リビング（夜）

一軒家のリビング。隣にはキッチン。

ダイニングテーブルで向かい合う遠野圭子（60）

と遠野愛（36）。愛は短髪で、男性的な装い。

圭子の前には手術同意書が置かれている。

圭子、顔を覆う。

愛、立ち上がり、圭子の横へ。

宛名だけが書かれた手紙を差し出す。

愛 「落ち着いたら、読んで」

圭子、手紙を受け取り、

圭子 「愛ちゃん」

引き止めるように見つめる。

愛、一瞬目を閉じる。

小さく首を振る。

背を向け、そのまま部屋を出ていく。

2. 遠野宅・リビング（朝）

圭子、ソファで目を覚ます。身なりは昨夜のまま。

起き上り、キッチンへ。

3. 遠野宅・キッチン（朝）

小窓から朝陽が差し込むキッチン。

圭子、水切りカゴからグラスを取り、水を飲む。

窓を見て、目を細める。

4. 遠野宅・リビング（朝）

圭子、リビングに戻る。

部屋の隅にある、小さな仏壇を見る。

亡くなった夫・遠野晃（55）の遺影と位牌。写真

の中で晃が微笑んでいる。

圭子、申し訳なさそうに目を伏せる。

視線をテーブルの上へ。

同意書の上には、昨夜の手紙。

圭子、手に取り、裏返す。

差出人には「遠野晃弘」。

圭子の目が開かれる。

× × ×

昼の日差し。

圭子、テーブルを前に座ったまま。服は着替え済み。
手紙は未開封である。

仏壇のほうを見る。変わらぬ夫の微笑み。

圭子、勢いよく立ち上がる。

そして遺影を伏せる。

× × ×

圭子、テーブルに戻っている。

手紙を手取る。

改めて差出人を見つめる。

封を開けようと、ハサミを構える。

携帯電話が鳴る。テーブルの上で振動している。

圭子、反射的に電話に出る。

圭子 「もしもし。うん。え？ 今から？」

窓の外を見る。

すでに日が傾いている。

5.

ファミレス・店内（夜）

窓側のボックス席。店内は学生や家族連れが多い。

秋山美紀（60）、興味津々な笑顔。

美紀 「それで？ 読んだの？」

圭子 「その前にアンタが呼び出してきたんでしょ」

美紀 「それは失礼いたしました。で、手紙もってきてないの？」

圭子、テーブルの上に手紙を出す。

美紀、手紙を手取る。

美紀 「名前、アキヒロって読むのかな。晃さんから取って？
はあ、いい子じゃない」

美紀、封筒を開こうとする。

圭子、慌てて奪い取る。

圭子 「開けていいって言ってないでしょ！」

美紀 「すぐ読んであげなっば」

圭子 「（大声で）だから、まだ落ち着いてないんだって！」

店内の注目が集まる。

圭子、口に手を当てる。

美紀、苦笑。

美紀 「ごめん。ババアになるとおせっかい焼きたくて」

圭子 「やめてよ。私もババアってことになるじゃん」

ふたりの空気が緩む。

子供の泣き声。離れた位置のテーブルからである。

4歳ほどの女の子が泣いており、両親がおろおろと
している。

女の子 「車がよかったの！」

圭子、**女の子を見る。**

圭子 「愛も、車とか恐竜なんかがよかったんだよね」

美紀 「それで圭子はどうしてたの？」

圭子 「選べるなら、選ばせてた。洋服とかも男の子用のでさ」

美紀 「私らの時代でそれはすごいわ」

圭子 「でも、今回は話が違うでしょ。体にメス入れんのよ。お
もちゃとは違うの。体を変えるなんて。正直、怖いよ」

美紀 「私も**怖い**と思うよ」

圭子、驚く。

圭子 「美紀はどっちの味方なのよ」

美紀 「アンタら親子の味方。愛ちゃん？ **いや、晃弘くん？**
にも久々に会いたいしね」

圭子、手紙を見る。

圭子 「**絶縁状だったらどうすんの**」

美紀 「なら読まないでおく？」

圭子 「それはない。けど、心の準備がね？」

美紀 「丸一日かけて、それはないでしょ。ぐだぐだしてたら死
んじやうよ。私ら、もう60だよ」

美紀、けらけらと笑う。

圭子、つられて笑う。

女の子 「ありがとうございます！」

先ほど泣いていた女の子が、店員におもちゃを取り
換えてもらっている。周囲に笑顔の花が咲く。

圭子、鞆からハサミを取り出す。

6. ファミレス・外観（夜）

女の子、母親に手を引かれ、歩いていく。

向かう先には車が停まっている。

運転席には父親。

7. ファミレス・店内（夜）

圭子、窓の外を見る。

そして、自分の右手を見る。

8. （回想）遠野宅・リビング（夜）

ソファアが壁際に寄せられ、中央には棺がある。

圭子、棺に寄り添い、泣いている。

愛 「お母さん」

圭子、顔をあげる。

愛が立っている。ボブカット。女性用の準喪服姿。

愛 「遅くなってごめん。明日から休み取ったから」

圭子 「愛ちゃん、愛ちゃん」

圭子、右手をのばす。

愛、近寄り、その手を両手で包む。

愛 「私がいるよ」

圭子、愛の手を握り返す。（回想終了）

9. ファミレス・店内（夜）

窓の外。親子の姿はない。

封筒の横に、折りたたまれた便箋。

圭子 「……もっと早く言いたかったんだろうね」

美紀 「そう書いてあったの？」

圭子 「ううん。私が晃のことで参ってたから……言えなかった

んじゃないかな」

美紀 「ああ」

圭子、便箋を見る。

圭子 「『愛ちゃん』って呼ばれるのが苦しかったって。でも、

それで私を嫌ったことはないって。優しいよね……」

美紀 「やっぱ、いい子。間違いないくアンタの子どもだわ」

圭子 「育てたつもりだったけど、私のほうが育てられてたよう
なもんよ」

会話が途切れる。

圭子、美紀のカップを見て、

圭子 「コーヒー、持ってこようか。それともジュース？」

美紀 「それより、愛ちゃんに電話しなくていいの？」

圭子 「晃弘のこと？」

美紀、一瞬驚くも、すぐに笑顔。

美紀 「もう呼べてるじゃん」

圭子 「今度は私が手を引いてあげたいの。子供に強がらせたま
んまじゃ恥ずかしいし」

美紀 「ふうん。あの世の晃さんも安心だね」

圭子 「肝心な時にいなくて困ったもんだけどね。あっ」

美紀 「なに」

圭子 「遺影伏せたまんまだわ。なんか笑顔がむかついて」

美紀 「もういいから帰りなさいよ、アンタ」

圭子 「言われなくても。美紀はもうちょっとゆっくりしていき
なね」

圭子、伝票を手に取り、去る。

10. 遠野宅・リビング（夜）

間接照明だけが灯るリビング。

圭子、電話をかける。

呼び出し音を聞きながら、伏せた遺影を元に戻す。

愛の声 「お母さん？」

圭子 「次はいつ来るの？」

愛の声 「それって」

圭子、小さく息を吸う。

圭子 「晃弘」

電話の向こうで、愛が息を詰まらせる。

圭子、優しい表情。

圭子 「ちゃんと話そう」

キッチンへ向かう。

11. 遠野宅・キッチン（夜）

圭子 「うん。うん。待ってる。大丈夫だからね」

圭子、電話を切る。

水切りカゴからグラスを出し、水を飲む。

壁に寄りかかり、小窓を見る。

ゆっくりと目を閉じる。

（おわり）